

2018年 新春会長メッセージ

心にしみた温かいスープ — 厳寒のドイツで触れた人の情け

クリスマス休暇に入ったドイツ・ゲッティンゲン大学の国際学生寮は、人気（ひとけ）もなく寒々としていた。薄曇りの窓外には小雪が舞い、中庭の樅の木も白い毛皮を着たようで、今にも橇に乗ったサンタクロースが現れそうな、そんなホワイト・クリスマスだった。

寮母の連絡で玄関に出てみると、腰の曲がった見知らぬ老女が杖にすがって立っていた。聖夜を寂しく寮で過ごす外国人留学生を、近くの自宅に招きたいとの優しい申し出である。私はもう一人の寮生と共に、膝まで積もった雪を踏みしめながら老女の丸い背中に従った。

その住まいは二階家の一階で、中は狭いが暖炉の小さな炎が暖かかった。日本ではクリスマスをどう祝うのか、両親は健在かなどと尋ねたのち、衝立の後ろから温かいスープと鶏肉の料理を運んできた。身も心も温まり、老女の気配りが骨身にしみて思わず涙腺が緩んだ。

ワインに上気した老女は、思い出の糸を手繰るように人生を振り返っていたが、暖炉の上の写真に目をやって、病死された元大学教授のご主人と事故で亡くした息子さんの思い出を話すと、どっと涙があふれた。「あなたたちと同じくらいの歳でした。優しい子で・・・」と声を詰まらせた。

冬が過ぎ、夏学期も終わり、私は郵便局から派遣元の旧東京銀行へ修了論文を発送した後、お別れにチョコレートの小箱をもって老女の家を訪ねた。家は静まり返っていて、隣人に訊ねると春を待たずして亡くなられたとのことであった。

異国で親切にされると、ことのほか身に沁みる。その後何度か海外勤務を経験したが、その都度ドイツの老女の温かい気配りを思い出し、我が家にも日本人留学生や単身赴任者をお招きし、家内の手料理でもてなした。シドニー時代にはしばしばワーキングホリデーの学生さんも立ち寄ってくれた。

今はスマホで母国の肉親との通話も簡単で、昔ほどの孤独感はないかもしれない。それでも異国で家庭に招かれ風習や考え方に接することは、どれほど国際理解に役立つか計り知れない。横浜日独協会でも毎年フランクフルトの姉妹協会から派遣される高校生を会員宅のホームステイで受け入れている。

JDGY は今年設立8年目に入ります。今年一年の会員皆様のご健勝・ご多幸をお祈り申し上げます。（了）

横浜日独協会会長 早瀬 勇